

島の「重さ」、あるいは裸のキューバ

久野量一著

『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』

松籟社 二〇一八年六月

「ただ困難なものだけが刺激的だ」というのは、『アメリカの表現（原題：La expresión americana）』（一九五七）、南北アメリカ、新大陸の文化、文芸を含む芸術論冒頭の、よく引用されるホセ・レサマリマの言葉だが、文学研究の困難は晦渋な文章の読解にだけあるのではない。様々な困難を推測させるキューバ文学との長き格闘の末にまとめ上げられたこの著作は格別に刺激的だ。

序章で、革命前からポスト・カストロ期にいたるキューバ文学の深層に迫る全九章を貫く通奏低音のごとき対立、「肯定の詩学」vs「否定の詩学」が紹介される。前者の代表に選ばれているのが、レサマリマ、カルペンティエール、ギジェンらであり、後者をピニエーラ、アレナス、パディージャらが代表すること、さしあたり確認しておこう。ペロニズムに言及しないボルヘス論は可能だが、キューバの文学を語るには政治的コンテクストの特異性を等閑視するわけにはいかない。ふたつの詩学の背景には、権力に所有される公の歴史vs回収を拒み続けるパーソナルな反歴史といった対立図式が透けて見えてくる。むしろ、歴史観をめぐる闘争は単純な図式化を許容するものではないのだが。第七章、革命政府の文化政策を振り返る中での、

アルチュセールのコンセプト（国家のイデオロギー諸装置）への言及はじつに鮮やかだ。この参照によって、制度のフィルターに濾された文学が、いかに権力強化の道具へと変質するのかが、すつかりと了解されることになるのだが、権力の描く理想が、皮肉にも、歴史的状況の意識へと人々を目覚めさせることにあつたのならば、この従属あるいは共犯関係は、不可避のものである。文学というものが共同体の倫理的基底の構築に資するものであるかぎりは、これを受けて、正典化を道具化とイコールでむすび、ひたすらイデオロギー装置としての文学作品の有用性を検証するような文学研究が思いつかれたとしたらば、それは、制度的規範の存続ありきの刺激のない結論、例えば、周縁部を取り込むようにして規範は開かれていくよりないが、大義自体は見失われることはない、などといったつづきとともに終わってしまっただろう。だから、ということになるだろうか、時代および現実政治とともに移り変わっていく正典／正典外の線引きに注目するのみならず、作品の真価を問うための、冒頭で導入された「肯定の詩学」vs「否定の詩学」という弁証法的な解釈のコンセプトが生きてくる。正典と正典外の文学、肯定と否定の詩学という、ふたつの二項対立は常に重なり合うものではないし、そもそもある文学テクストが注目に値する作品であるかどうかは、交錯する要請が織り成す緊張にかかっているのだということがわかってくる。第五章におけるデスノエスの「仕掛け」と「綱渡り」をめぐり読みときがその好例を提供してくれる。また、キューバの外の文脈、第九章における「マッコンド」が生まれるようなポストモダンの環境に著者が注意を払い、メキシコ人作家によるキューバ文学の可能性

について語るのも、国民主義的、閉塞的、一元的ステレオタイプ
の理解への警戒からにちがいない。

さて、著者が全面に押し出すピニエーラの文学の否定性は、
かたや、その創作にアンチ・ポエティック、またはアンチ・バ
ロックといった形容を与える批評を可能にしているようで、ピ
ニエーラの詩集へのそうした書評がすぐに見つかる。だが、そ
うした評価には仮想の正典の規範性に照らしての速断といっ
たうらみがないだろうか。本書はニヒリズムを凌ぐ文学の否定
性が可能性の母であることを示唆してやまない。第一章でピ
ニエーラの短編「落下」が詳細に分析されている。物語中、登
山⇓落下⇓身体の断片化のプロセスは、レサマ||リマの作品世
界の読解に欠くことのできない、オルペウスの神話のエピソー
ド、冥界下り⇓帰還⇓八つ裂きの死と、ねじれた対称関係にあ
るように見えてならない。対称にねじれがもたらされる原因
は、むろん、落下と上昇の逆転にあるのだが、オルペウスの復
活は宗教的次元を切り開くのに対し、ピニエーラの短編中、落
下そして分断化されるものの蘇生は、超越性のない身体的な地
平におけるある磁力、登場人物間の同性愛によって支えられて
いることも見逃せない。復活をめぐる含意の相違が鮮烈なコン
トラストを生んでいるのだ。だが、短編中仄めかされるにすぎ
ない上昇の軸たる垂直性、あるいは直線性は、主人公とその
パートナーが織りなす水平性、または円環性と補完し合ってい
ないだろうか。再文脈化によって新たな意味を付与される愛の
磁力は、おそらくは雑誌『オーリーヘネス(起源)』のオーリーヘ
ネス、すなわちキューバ現代文学の胎動に伝わり響いていた、
引き裂かれた伝統の母胎からの呼びかけにほかなるまい。著

者の「キューバとはヨーロッパ的な「生」に対して、「永遠の
さまざまな死」がはじまった土地のことかもしれない(五十二
頁)」、という見解の中で暗くきらめく「さまざまな死」の母胎
が呼びかけてくる。それは歴史的状况省察への呼びかけなど
ではなく、エウヘーニオ・ドールス以降考えられるようになって
た、単にある時代に支配的だった芸術様式というバロックとい
うものの規定を超えた、普遍的で時を超えた包摂力としてのバ
ロックの中で、もう、その再浮上を約束されていたものたち
の声でもある。この聞き取りがたき声の回復こそが、実はピ
ニエーラとレサマ||リマが課題として共有したキューバの文
学の宿命であると考えられないだろうか。「肯定の詩学」と「否
定の詩学」は、革命文学という強制の基層で眠るある外部、死
者たちの外部においてとらえ直されることで、キューバ性探求
の軌道が描く楕円のふたつの中心となるのだ。

そのように受け止めたとき、第七章で指摘される、「キュー
バ文学は一つ」、という正典修正の傾向から持ち出される着想
は、ラテンアメリカ文学は一つ、に敷衍して考えてみる価値が
ないだろうか。いったいどんな求心力が、非スペイン語テクス
トまでも包含するヘテロトピーたる「キューバ文学」、あるいは
「ラテンアメリカ文学」を貫き、多種多様な表現を一つのも
のとするのか。その答えは、ピニエーラ——アレナスの系譜に
対するコントラプリントである、レサマ||リマからセペロ・サル
ドウイへ続く軸を発掘することで見つかるのではないかと筆
者は考える。『アメリカの表現』が南北アメリカ大陸の文化・
芸術論であったことを思い出しておこう。キューバ性探求のふ
たつの中心は、より混沌とした、更なる外部を包み込む大きな

楯円を描く。レサマ||リマの存在は、ピニエーラとの表層的な対立の図式においては、重厚な教養に根付いた複雑な文体も手伝つてか保守的な「肯定の」文学の要のような厚みを得る。シントイオ・ビティエールらによる『パラデイソ』の顕彰などによつてもこの厚さは確かめられるのだ。しかし、そのように正典化されるレサマ||リマ像は、ピニエーラらの文学の見かけの「重さ／軽さ」を測るための対置項でしかない。ピニエーラの文学を「否定の詩学」の結実たらしめる裸の否定性は、ほかでもない、レサマ||リマのバロックを貫く、起源への期待によつて賦活されているものではないだろうか。レサマ||リマの重層的なイメージが覆い隠すことによつて明らかにするもの、バロックの中心には解消不可能なアンチノミーがあると言う、サルドウイのバロック論があぶりだす、西洋形而上学の主体の中心性に対するもうひとつの不在の中心、それはキューバの、あるいは新世界の、旧世界に対する根源的な否定性の目に見えない抛り所にして、永遠に失われていく楽園の蘇生を約束する渴望にほかならない。亡命の途にありマリア・サンブラーノが若きキューバ人詩人たちのうちに見出し共有した「秘められたキューバ (La Cuba secreta)」、まだ生まれていないキューバ、これから産まれ来たる世界の感触を伝えていたレサマ||リマやピニエーラらの言葉は、ラテンアメリカ文学に尽きることないアクチュアリティーの源を保証するようだ。歴史vs反歴史を包摂する前歴史、あるいは「わたしにはふたつの祖国がある。／キューバと夜だ」と言ったときのホセ・マルティーの「夜」に、ノスタルジーに支配されたロマン主義的退嬰を見るか、それとも、これをより根源的な脱構築の水準とするかは、もちろん読

者次第だ。

最後に、こうして幾様にも見出されていくふたつの中心をめぐつて、レサマ||リマの「ビルヒリオ・ピニエーラ六十歳になる (原題: Virgilio Piñera cumple 60 años)」という詩作品の後半部分を読んでみる。

なんとも可笑なことだ、戯れの騒ぎは断末魔の悲鳴なのだから。

ただ、善と不在のみがあるのだから、

天使と墮天使たちは、微笑みながら姿を消すのだ。

その手は熟し、熟したブドウの房というときと同じだ、

チェス盤にありつたけの力で平手が振り下ろされた。

天使はビショップのようにすばやく進む。

悪魔は斜めに立つ頭髪のように吹っ飛ぶ。

十字に縛られたその両手は、カバラが捻り出す

六十の打撃を叩きつける、

教皇と女帝が

女王の部屋でもう眠っている。

同心円の瞳と海が開く。

厚い大きな板の上で

凄まじき

善と不在のゲームが続く。

本書序章でそのあらましが回顧される「パデュージャ事件」(二九七二)へのアリュージョンと思しき引用冒頭の詩行は、革命政府の文化政策によつて一部の詩人たちがいかに呪われた存在とならざるを得なかったか、その状況へのアイロニカル

な一瞥である。パデジージャの「ゲームの外」への追放は、文化政策の終わりの始まりだったことをわたしたちは知っている。天使と墮天使、ともに創造主によって産み落とされた者たちは自らの始原を問い始めていた。地獄の深みへの下降と楽園の高みへの上昇。だが大いなる意図は、対立者たちが手を結ぶことでは容易には解き明かされない。もう一度、今度こそ命がけのゲームが始まる。いまや、対立するのは善（地上における理念の受肉すなわちイデオロギー）と一切の超自然の不在。競技者たちは交代をほのめかしつつ退場する。熟した時が開始を告げる。「善」の有無を言わさぬ一撃。それに対し繰り出されるのは、生涯をかけた、生涯を通し試みられてきた、もはや伝統（カバラ）の厚みを持つ、神意の解釈にも似た究極の意味への問いかけ。生まれ落ちた瞬間から自由を奪われていた、そして今や呪われた者でもある問いかける詩人の、その存在こそが、大いなる問いへの答えであり続けるべきなのだ。その誕生は記念に値する出来事に違いない。問いかけにして答えである詩、始原の到来を待つ女王である詩の中で、天と地の橋架けを司る教皇に守られ、唯一の女帝、聖母はもう救世主Ⅱ可能性を身ごもり眠っている。潜在的でしかありえないものの現実が、そこでのみ息づいている。救世主は始原の深みから到来するだろう。「善と不在」のあいだで、大いなる板、裸になったキューバという島で、過酷なこのゲームが続く限り。

くり返される「善と不在」の意味を本書に照らして考えてみると、著者によって「枠内に入っていればよく、反革命的なものは何も認めない（一六六頁）」と訳されている、カストロ政府の絶対的理念の宣告と、これに対する、目に見えない、もう

ひとつの中心、という解釈が有力に見えてくる。天使と悪魔のゲームは、著者が教えてくれるように、もはや「島」の外で、別の次元で、別の者たちによってくり広げられているのかもしれない。それでも、詩の中で、救世主Ⅱ期待は胎動し続けている、また、それゆえ、始原と外部を切り開き続ける文学の外には、希望の名に値するようなものは、もう何も残ってはいないのではないか、そして、島の「重さ」とはこの「不在」の重さなのではないか、そんなことを考えさせられた。

（駒澤大学 真下祐一）

